栄町に伝わる昔話

栄町にはたくさんの昔話が伝わっています。昔の人々の暮らしぶりや信仰の様子を知ることができます。一緒に昔話の世界を旅してみましょう。

鏡井戸の剣（木塚）

むかし、今の安食台、米の内公園の下側あたりに井戸がありました。その頃は木々が奥深く生い茂る小高い山になっていたので、そこからしぼられてくる冷水で、その井戸はどんなに日照りが続いても水は絶えることがありませんでした。上から見ると、水はまるで鏡のように澄んでいたので、土地の女たちは自分の顔を映し、自分の美しさに見惚れていました。しかし、男がその井戸を覗くと、水面には必ず鋭い剣が映っていたということです。

明かしの松（須賀）

印旛沼の小竜が雨を降らせ、身体を三つに引き裂かれた時のこと。

人間のためにその身を犠牲にした竜の話はすぐに人々の間に広まり、それに感じ入った人たちが、下総は言うに及ばず、上総や常陸、遠くは奥州から、竜の頭が落ちたと言う龍角寺を目指してやってきました。そして、北辺田から龍角寺へ続く細い道は人でいっぱいになり、とうとう寺まで行き着けない人もあり、仕方なく大きな松の下で一夜を明かしたといいます。そこで、その松を「明かしの松」と呼ぶようになったそうです。

鬼は内（興津）

むかし、興津にひとりぼっちで、寂しく暮らす老人がおり、いつも「ああ、こんなに寂しくては生きてもつまんねえ、早く死にてえなあ」と、ひとりごとを言っていました。

何年か前には、妻も子どももいましたが、二人とも病気で失いました。他の家が、楽しそうにしているのを見ると、心がつらく、毎日、「ああ、死にてえ、早く死にてえ」と、言っていました。

そんなある年の節分のこと。どこの家でも、子どもたちが大きな声で、「鬼はそと！福はうち！」と、楽しそうに豆をまいていました。「ああ、つまんねえ、死にてえ」老人はそうつぶやくと、いきなり豆を鷲づかみにして、「鬼はーうちー！福はーそとー！　鬼はーうちー！福はーそとー！」と、叫びながら、豆をまきました。そして、「福なんていらねえ！鬼に食われて死にてえ！鬼よ、来い！鬼はーうちー！福はーそと！」と怒鳴りました。

すると、他の家を追い出された大勢の鬼たちが、われもわれもと老人の家にやってきて、ごちそうや酒をひろげて、宴会が始まったのです。鬼たちは、驚いている老人にも、酒やごちそうをすすめ、興が乗ってくると、歌や踊りも始めました。こうして、老人は久しぶりに楽しいひとときを過ごしました。

その日から、老人は、「死にてえ」などと言わなくなりましたが、「ああ、早く節分になんねえかなあ」毎日、そう言いながら、暮らしたということです。

入院した白蛇（布鎌）

むかし、布鎌村にたいへん腕が良く、名医と評判の医者がいました。ある日の夕方、身体中に包帯を巻いたどことなく気品のある娘がこの医者を訪ねてきて、自分は川向こうに住んでいる者だが、訳あってこのような大けがを負ってしまったので、入院させてほしいといいました。医者は、空いていた奥の部屋へ娘を案内しました。部屋の前まで来ると、娘は、わたしは寝ているところを見られるのがいやなので、用事の時は必ず声をかけてほしいというと、ピシャリと戸を閉めてしまいました。

2～3ヵ月が過ぎ、ひどかった娘の傷はすっかり癒えて、明日はいよいよ退院という日の夜中のこと、医者は「ゴーン、ゴーン」という大きな音にびっくりして目を覚ましました。それは、あの娘のいる部屋から聞こえてきます。医者は娘との約束を忘れて、声をかけずに部屋を開けてしまいました。中に娘の姿はなく、大きな白い蛇が部屋いっぱいにトグロを巻いていたのです。医者は、そのまま気を失ってしまいました。家族が駆けつけた時には、誰もいない部屋の前に医者が倒れていました。

その娘が入院した頃、対岸の立木村の明神様で、御神木を切り倒そうとした者がおり、木を切り始めると、突然、真っ赤な血が流れ出しました。村々では、その時、ご神木の中にいた白蛇が切られて怪我をしたのではないかと噂になったということです。

サイカチ山のキツネ（木塚）

木塚の徳兵衛さんが酔っぱらって家へ帰る途中のこと。自分の前を若い娘が歩いているのに気が付きました。聞くと、須賀村の親戚まで行くのだが、提灯の火が消えてしまい、困っているといいます。気のやさしい徳兵衛さんは、自分の家を通り越して娘を送ってやることにしました。やがて須賀村へ着こうかという時、娘は「ありがとう」と言って走り出したかと思うと、たちまち姿が見えなくなりました。

徳兵衛さんは目をこすり、首をかしげながら、もと来た道を戻ろうとして驚きました。一本しかないはずの道が三本に分かれていたからです。

「あー不思議だ、こりゃあ不思議だ」と思いながらも、真中の道を選んで、歩いていくと、先が二間（3.6メートルくらい）ばかり切れて、水が溜まっていました。このくらい、大したことはないと思い、着物の裾を捲って裸足になって歩いていきましたが、先に見える道になかなかたどりつけず、歩けば歩くほど深くなっていくのです。「おー、ふけぃ、おー、ふけぃ」と、歩いているうちに、とうとう朝になってしまいました。気が付くと、ひとつの田んぼの中をグルグル廻っていたのです。

徳兵衛さんがサイカチ山の女キツネにばかされたという噂は、あっという間に広がりました。

だいだらぼっちの足跡（龍角寺）

むかし、この辺にはだいだらぼっちがおり、いつも筑波山に腰を掛けて休んでいました。ある日、小便をすると、その水がたまって印旛沼になりました。その時の足跡が大きな窪地になって残っていました。

今は、造成されて、千葉県立房総のむらの駐車場になっているということです。

（監修　栄町史編さん委員会会長　高塚　馨）